

聖霊降臨後第8主日(特定14)

2011/8/7

聖マタイ福音書第14章22節～33節

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

先週は、イエスさまが5つのパンと2匹の魚で男だけで5千人もの人々を養って、尚、あまりが12の籠に一杯になった物語を読みました。この物語を通して、命の賜物を豊かに与えることがおできになる方は、イエスさまだけだということ学びました。それに引き換え、弟子たちは全くの無力であること、イエスさまと一つに結ばれていなければ、自分の力では何もできないことに気づくことの大切さも教えられました。イエスさまと一体になった時に、弟子たちは初めて人々の中に踏み込んで行って、命の賜物を配る働きをすることができるのでした。今日の物語は、その続きです。

さて、マタイ、マルコ、ルカの3つの福音書は、共観福音書と呼ばれており、マタイとルカはマルコを土台として、その上にそれぞれの資料も採り入れて自分たちの福音書を書いたと言われています。従って、全体の流れもマルコを基本として描かれていくようになります。しかし、ヨハネの福音書だけは、独自の観点から自分の福音書を描いていますので、共観福音書とは異なる展開となっています。

そのヨハネの福音書でも、先週のパンの奇跡の物語と、今日の湖の上を歩く物語は、マルコとマタイと同様に、続けて語られています。そのことから、この2つの奇跡物語は、福音書の記者が取り入れる前から、連続した物語として語り続けられて来たと考えられます。2つの物語は、関連して読まなければならないということでしょう。

ヨハネのパンの奇跡の物語では、そのしるしを見た人々は、イエスさまを王様にしようとして連れて行こうとしたので、イエスさまはひとり山に退かれたと、人々の要求を拒否したことが記されています(6:15)。そしてそのために弟子たちだけが舟に乗ってガリラヤ湖に漕ぎ出すことになったと、その理由を語っています。

人々が飢えることのないように、有り余るほどのパンを与える力のある人を王様に担ごうとすることは理解できることです。人々が安全な食料を安心して豊かに手に入れるようにする。そのための食料政策は、政府にとってはほかの何をおいても取り組まなければならない絶対的な課題です。わたしたちは、今、そのことを実感しています。

わたしは、ある本を読んで大変驚いたことがあります。それは4世紀にローマ帝国の首都をコンスタンティノープルに移したコンスタンティヌス1世は、新しい首都に新居を建てるすべての人々にパンを無償で配給したというのです。そのためにエジプトから十分な穀物を輸入し確保することが主要な国家事業でした。これは、貧しい市民の必要に応じて行なわれたものではありません。そうではなくて、ビザンツ人であること、新しい首都に住む住民の特権を示すために行なわれたのでした。

コンスタンティノープルの人口が最大になったのは、6世紀半ばのユスティニアヌス帝の時です。50万人もの人々がいたそうです。その全員にパンが行き渡るように、毎日、焼かれて無償で配られていたのです。これは、現代日本では考えられない、驚くべき政策だと思います。

7世紀の初めに、エジプトがペルシャ人によって占領されてからは、さすがに無償とはいなくなりましたが、それでもこの政策は、その後に渡って維持されていきました(『ビザンツ』)。この事業を実施することで、直接・間接に関わる様々な業種の事業者にもたらしたでしょう。また、人々に雇用の機会を提供することになったわけですから、経済の発展に計り知れない貢献をしたことでしょう。

人々が食べることに困らないようにすることは、権力の座にある者が人々の支持を勝ち取って、その座を維持するためには必要不可欠のことです。イエスさまが荒野で悪魔の誘惑にあった際にも、悪魔が提案したことは、石をパンに変えて空腹を満たしたらどうか、ということでした。パンを与えて宣教しろと唆したのです。イエスさまは、その道をお取りにはなりませんでした。人は「神の口から出る一つ

一つの言葉で生きる。」それがイエスさまの確信であり、そこに真の救いがあることを宣教されたのです。

話がそれましたが、イエスさまが弟子たちだけで向こう岸へ先に行かせようとなさった理由は为什么呢。「弟子たちを強いて舟に乗せ」とあります。弟子たちは、イエスさまと分かれて別々に行動したくはなかったでしょう。それでも、無理矢理に、弟子たちだけで先に行かせたのです。

イエスさまは、お一人で祈りに集中したかったのでしょうか。パンの奇跡が行なわれたのは、洗礼者ヨハネが領主ヘロデによって首を切られて殉教したという報告がもたらされた直後でした。イエスさまも、ご自身の身に危険が迫って来ていることを感じ取ったに違いありません。ヨハネの死を悼み、ご自身の使命を確認し、改めて覚悟を決めるためには、父なる神さまとの祈りの時を必要とされました。その時を確保することが、後から追いかけて来た群衆によって妨げられたのです。

群衆を解散させ、今や、その祈りの中に没頭されようとしたのでしょうか。そうかもしれません。でも、それだけではなかったでしょう。イエスさまの身に危険が迫るということは、言い換えれば、弟子たちとの別れの時が近づいて来たということです。別れの時を予感されたのです。弟子たちだけが残されたら、彼らは一体、何ができるのでしょうか。弟子たちが、そのことを予め体験することを、イエスさまは配慮されたのではないのでしょうか。

弟子たちの舟は折りからの逆風に悩まされて、湖の中ほどで往くこともできず帰るに帰れず、漕ぎ悩んでいました。舟は教会を表しています。嵐の海は、この世の姿でしょう。

マタイの教会も、決して順風満帆で宣教活動が進められたのではありません。いや、むしろ波風の吹き荒れるような中で、宣教が思うようには進まず、恐れと不安に支配されるような状況であったのでしょう。そのような中で、弟子たちだけで嵐のガリラヤ湖で漕ぎ悩んでいた時のことを思い起こしたのです。

イエスさまは、将来の自分たち、弟子たちのことを心配して、敢えて自分たちだけで風の吹き荒む湖に漕ぎ出させたのではないか。どんな嵐にあっても、信仰を持って生きるということが、どのようなことなのか、自分たちが悟ることを期待して、言わば、自分たちを訓練し教育するために、自分たちだけで先に行かせたのではないか。自分たちに対するイエスさまの期待と心配りが、あの時のイエスさまのお心だったのだと、マタイの教会ははっきりと認めることができたのではないかと思います。

弟子たちの中には漁師の出身の者が何人もいますから、舟を操ることにかけては専門家です。技術面だけではないでしょう。ガリラヤ湖についての知識も経験も豊かなものでした。しかし、その専門家にしてみても何とも手の施しようがないのです。大波の中で沈むばかりなのです。

そこにイエスさまが波を渡って近づいてこられます。二進も三進も行かなくなっていた弟子たちの目には、そのイエスさまが幽霊に見えました。頭が混乱し、気持ちが動転していた弟子たちには、そこにいるはずのないイエスさまの姿は、幽霊としか見えなかったのです。化け物が現れたと見間違えたのです。

「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」イエスさまは、そう弟子たちに告げられました。「わたしだ。」これは、聖書の中でとても重要なみ言葉です。神さまがご自身を現される時に用いられる言葉です。モーセが燃える柴の中から神さまの召命を受けた時に、神さまはご自身のことを、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と紹介されました(出エジプト記3:14)。イエスさまが怯える弟子たちに、「わたしだ」と言われたのは、これと同じ言葉です。「わたしだ。だから恐れることはない。安心しなさい。」わたしがここにいる。わたしが、あなたがたと共にいるのだから、恐れなくて良い。

ペトロは、「わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください」とお願いします。み言葉を下さいとお願いしたのです。み言葉が成ることを信じたのです。「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」ことを信じたのです。そしてイ

イエスさまを見つめて波の上に踏み出しました。嵐の中で宣教に一步、踏み出したのです。

イエスさまに目を注いで逸らさないでいる間は良かったのです。しかし高波に目を奪われ、恐れを抱いた時に沈みかけました。嵐の湖は死の世界です。滅びの世界に吞まれようとしたのです。イエスさまに集中することをせず、周りの嵐に心が向いた時に疑いが生じます。2つのものに同時に目が向くことから疑いが起こります。疑いの心が恐れを招きます。宣教の挫折が起こります。命の主に対する信頼が揺るぐのです。

イエスさまはペトロを叱りました。同時に手を伸ばして、水の中から引き上げてくださいました。この時ペトロは、イエスさまの手の温もりをしっかりと感じ取ったのではないのでしょうか。ペトロの疑いを厳しく叱責するのではなく、暖かく手を差し伸べて、捕らえて下さる方を経験したのです。これはペトロの復活体験です。

2人が舟に乗り込むと風は静まったと記されています。これはマタイの教会が体験した信仰の告白です。ここにはおられるはずはないと思っていたイエスさまが、共にいてくださる。命と平和の主が支配しておられるとを体験したのです。だから、どんなに嵐が吹きすさぼうが、「安心しなさい。わたした。恐れることはない」との主のみ言葉を聞いて、波の上に一步を踏み出したのです。

わたしたちにも、強いて舟に乗せられることが起こります。不安と恐れの中で船出しなければなりません。しかし、そこでわたしたちもマタイの教会が聞いたと同じみ言葉を聞くことが赦されるのです。「安心しなさい。わたした。恐れることはない。」

主に感謝。